

〔曲名〕 Vecchia Serenata

古風のセレナータ

〔曲種〕

〔作曲者〕 Amedeo Amadei

アメディオ アマデイ

〔整曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

1905年6月、ボローニャのイル・コンチェルト誌に発表された佳曲。1904年から5年にかけて行われた同誌主催の作曲コンクールに金牌受賞しているが、

当時はまだ楽器編成が小規模で、二つのマンドリンとギターに書かれていることもあって、今日では殆ど忘れられて埋もれたまゝになっている。

この作者のマンドリンオーケストラ曲の代表作が、1909年イルプレットロ主催の作曲コンクールに一位入賞した" 海の組曲" であることを知らぬ愛好家はいないが、

既にこの曲にその片鱗が窺（うかが）われる。

第73連隊付吹奏楽団々長時代の作で、ミヌエットとガボッタの二つで構成されているが、本曲はミヌエットだけで、敢えてガボッタは割愛した。

アマディオはこの二つの舞曲の形に特別の愛着があり、沢山の作品があって何れも美しい。

作品146番にもミヌエットとガボッタがあり" イ調・ト調のミヌエット" " 飛び交う螢" " ギターとマンドリン" と題して両親に贈ったピアノ曲もガボッタ調である。

ミヌエットは多くの舞曲の中でも、交響曲にも採り入れられるほどの品格があり優雅である。

私は此処で現今の日本のマンドリン界の風潮について言及しておきたい。

大正後期から昭和の初期にかけては日本のマンドリンオーケストラのレパートリーは実に豊富であった。

それが半世紀を疾づくに越えた今日どうであろう。昔の面影はないと言ってよい。

新しい日本の作曲家のものも順次加わってきてはいるが、失われて了った佳曲が多いのである。

伝統を誇る民間団体でも学生団体でもメンバーの層が順次交替して、昔を知らない為にさして痛傷を感じないし、大掛かりな大編成のものばかりに取り組んで、

そうしたものがマンドリン合奏と思い込んでいるので、一旦一身上の都合でその場を離れると萎縮して了うケースが多いのである。

楽譜の管理なども永い間には担当者が変わったり、熱心だったり、曖昧（あいまい）だったり、杜撰（ずさん）だったりして、パート譜が欠けたり、

パート譜は在ってもスコアが失われたり、手書譜を照合する原の印刷譜が無かったりして、そうしたことが重なって何処もレパートリー縮小の道を辿ることになるのである。

この曲もそうした意味でマンドラ、マンドチェロ、コントラバスを補足しただけで、

少人数でも多勢でも楽しめるように配慮したもの、従って編曲でないことをお断りしておく。

1993年 2月 発行

マンドリン合奏曲集 2 集（JMU版 パート譜付）より